



作家
元国際線乗務員
黒木安馬

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に「ファーストクラスの心配り」、「あなたの人格以上は売れない!」(プレジデント社)、「成「幸」学」(講談社)、「出過ぎる杭は打ちにくい!」(サンマーク出版)、「面白くなくちゃ人生じゃない!」(ロングセラーズ)、「小説・球磨川」(上下巻・ワニブックス)などがある。
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ！———人生・農業リセット再出発 226

便!!

海外に出て、日本では当たり前だったのがそれが無いのに気づき、たいそう不便を感じることもある。不便も便利も、手紙の便りや便箋、郵便も、航空機の便、宅配便など「便」が付く漢字が多いが、話は便に便乗してお下品だが、ウンも方便、クソも小便、旅先の便秘で穩便に便宜を図ってもらいたい便所の話である。「便」の意味は、「運ぶ」、「手段」、「都合が良い」に使われるから、「便通」は口から胃腸を通過して「便意」を催して排泄されるまで都合良く運ばれることをいうのだろうか。アジア人は「米」を上部から食べ、胃腸で消化して下部から「異」なって出てくるから、漢字では「糞」になる。

寅さんの『男はつらいよ』、“結構毛だらけ猫灰だらけ、ケツのまわりはクソだらけ”の名セリフ、用が済めば誰しも拭くことになる。昔はトイレトペーパーなんてハイカラなものは無かったから、田舎だと新聞紙が置いてあって、それを読みながら“人糞地理学”の社会勉強をしたものだ。肥え桶をかけて育った畑のハクサイやホウレンソウの葉っぱの隙間には、活字の切れ端が残っていた。回虫の卵も大地で循環して人間を渡り歩いていた時代だったから学校の定期検便も多かった。綾小路きみまろのテレビ番組『あれから40年!』に30分も出演して丁々発止の対談をしたが、彼いわく、「夜遅く飲んで帰れば冷たい視線、温かいのは便座だけ!」と来た。私は即座に「冷たいのは親戚だけど、温かいのは遠赤だけ!」と返した。

WASHLETとはよく付けたネーミングだ。WASH + TOILET! イギリスやフランスなど欧州諸国を回ってみて一般にはほとんど普及していないから、流す時に、“アレっ? どうしよう”と不便を感じる。ウォシュレットはTOTO・東洋陶器が、東京オリンピック頃にアメリカの医療用温水洗浄便座を基に独自に開発した

日本発の商品名とか。瞬く間に日本国内で普及し、販売台数が5,000万台を超すという。INAXやPANASONICなど他社製も含め、今日ではアジア諸国にも大きく展開して使用されている。マドンナが「日本の温かい便座が懐かしかった」と発言したのを機に世界に波及した。最近では便器に近づくだけで蓋が自動で開き、使用後も自動で流される。最新式の多機能付き便座が当たり前だと擦り込まれた子供たちがホームステイしたアメリカから苦情が来た。「日本の子供たちはトイレの使用後に流さない、躰がなってない!」と。ラテン系のイタリアやスペインなどでは、ウォシュレットは無いが便器と並んで、女性が局部を洗浄するビデと一緒に設置してある。男には無縁だが、用途が分からない日本人が口をすすいだり、小便用だと思ひ……とトラブルは絶えない。

早稲田の学生時代に腹の調子が悪くて便所に駆け込んだらトイレトペーパーが芯だけしか残っていない。焦ったら壁に落書きが。「汝、カミに見捨てられし時は、自らの手によってウンをつかめ!」。あるトイレに入った時の話。個室で用を足していた時に隣に誰かが入ってきた。いきなり、「おう、こんちは」と来た。「は?」と思ったが、しょうがないので、「こんちはっす」と答えた。「最近どう?」と話してきた。「まあ普通だよ。忙しいのかい?」と適当にお茶を濁した。急に相手は声色が低くなり、小さな声で、「ちょっとかけ直すよ、何か隣にいちいち返事する変なのがいるんだよなあ」。

男性コーラスのダークダックスがソ連で公演を行なった。童謡コーナーで、「えーっさ えーっさ えっさほい さっさ〜♪」と見事にきれいなハーモニーで歌ったのに、なぜか会場は大爆笑になった。「ホイ、サッサ」はロシア語で“チ●コをしゃぶる”という意味なのだ!!